

DOJIN  
R18  
成人向け

小悪魔の変態オナニ動画 女騎士の城 歓迎、何でも挿入します!!

まさか本人降臨?

慌てて発言したせいで噛んでしまった。けど、勢いが止まるわけじゃない。

さっきの希望にウ

ゴウン、と音を立ててホンラが動き、  
空気の抜けすぎて感じが子宮の壁  
透明なチユウの中茶色いものが見  
あぁ、これかえ入れられちんだ  
早く入れて  
顔見えてる  
早く入れて  
【僕】こっつ、見えるの? 子宮今か

「子宮口見せるとか  
うわ、子宮口、  
壁、子宮口、  
べ物にならない快  
り始めた。  
うわ、子宮口、  
壁、子宮口、  
うわ、子宮口、  
壁、子宮口、

俺のも混ぜろ

# もし小悪魔になれたら

小悪魔の体で触手・スライム・蟲姦排泄物挿入を行う変態TSF作品!!

この作品には  
グロテスクな表現が  
含まれています

23/005:00

女騎士の城

【僕】「ふう…今日も疲れた…」

サービス残業を終えて家路を急いでいる僕は、とある会社に勤めるしがないサラリーマンだ。そんなある日、いつもの公園沿いの道を通ると、公園におかしな落書きがあるのを発見した。

【僕】「…ん？ なんだ」の落書き…？」

近寄って見ると、それは魔法陣のようだった。うっすらと発光すらしている。

【僕】「手が込んでるなあ…誰がこんな物を…」

どうやって描いているのだろうか。

僕は気になって魔法陣の端に手を触れた。その直後、魔法陣から強烈な光が放たれ、僕はしばらくの間、目がくらんでしまった。

「…？」「…？」「おや？ 大丈夫ですか？」

【僕】「は、はい…大丈夫です…」

何とか目を開けると、そこには見た事も無い美少女がいた。





【小悪魔】「ふふっ……」契約ありがとうございます」

【僕】「け、契約……？ 君は一体……？」

【小悪魔】「私は小悪魔、貴方の触れた魔法陣から召喚されましたよ」

【僕】「小悪魔？ 召喚？ ど、どっという事……？」

僕の疑問に対して、小悪魔と名乗る少女が丁寧に説明を始めた。どうやら彼女は「の世界で活動するために、男の体が必要らしい。それで魔法陣を描いて、それに触れて契約する男を捜していたという事のような。

【小悪魔】「というわけで、一週間ほど体を貸して欲しいのです」

【僕】「か、体を貸せと言われても……」

困惑している僕を横目に、小悪魔は立ち上がって、さらに説明を続けた。





【小悪魔】「その代わりに、私の体を一週間、貴方にお貸しします」  
【僕】「き、君の体を……？」

そう言われ、僕は小悪魔の体をまじまじと眺めた。  
美少女なだけでなく、スタイルも良く、肌もすべすべだ。  
いつの間にかスカートが短くなって、そこから覗く白い太ももがまぶしい。

【小悪魔】「この体、一週間の間、好きに使ってもいいんですよ？」

【僕】「で、でも……体を貸すなんて……」

困惑する僕を横目に、小悪魔はスカートの両端を掴み上げた。





【小悪魔】「ふふっ…見えますか？ 私のアソコ…毛も生えてなくて綺麗でしょ？」  
【僕】「うおっ…は、はいてないっ…」

初めて見る生の女性の割れ目に、童貞の僕は釘付けになった。  
勃起して前かがみになっていると、小悪魔が近付いて、  
僕の耳たぶをあま噛みしながら囁いた。

【小悪魔】「女の快樂は男の快樂とは比較になりませんよ…？」  
【僕】「うっ…ああっ…！」

もう僕の理性は吹き飛んでいた。  
僕は本能の赴くまま、小悪魔に思い切り抱きついていった。







【小悪魔】「気が付きましたか？」

【僕】「んっ……」は……？」

どうやら僕は、理性が飛んで小悪魔に抱きついた直後、気を失っていたようだ。僕は起き上がって周囲を確認すると、「こ」はどうかやら女の子の部屋のようだが、声はするのに小悪魔の姿はどこにも見えない。



【僕】「あ、あの……小悪魔さん……どこにいるんですか？」

【小悪魔】「ふふっ……貴方の目の前に居ますよ」

目の前と言われ、部屋の窓ガラスを見ると、確かにうつすら小悪魔が映りこんでいる。それを見て、僕は慌てて自分の体を確認した。



【僕】「ほ、本当に体が入れ替わった!?」「こ、これが僕の体…?」  
【小悪魔】「そうですね。なお私は貴方の体からテレパシーで話しかけてます」

部屋にある大きな鏡の向こう側で、スタイルの良い美少女が、自分の意思に併せて、自由自在に体を動かして、表情を変えていく。その肌に触れれば、整った指先と張りの良い頬の感触が伝わってくる。

【僕】「ほ、本当に入れ替わったんだ…!」

【小悪魔】「自分の体なんですから、自由にしてもらっていいんですよ!」

僕は興奮でドキドキしながら、スカートの両端を摘み上げた。





【僕】「こんな綺麗な体が…僕の…」

スカートから覗く割れ目は、無駄毛一本生えておらず、  
ぴっちりとした割れ目に、わずかにピンク色を浮かべていた。  
軽く触れるだけで電気が走るような快楽が脳天に突き抜ける。

【小悪魔】「ふふっ…もっと広げて見てもいいんですよっ」

小悪魔の声が僕の脳内に直接響く。

僕はもっとはっきり見るために、鏡の前で大きく足を広げ、  
割れ目の両端をセロテープで広げて固定した。





「僕」「うーっわがっ…女の子の…」

テープで広げたピンク色の性器がはっきり見える。  
クリトリス、尿道、膣口、すべてが鏡に映し出される。  
ピンクの肉ひだは、うっすらと愛液ででかりを帯び、  
僕の呼吸にあわせてひくひくと閉じたり開いたりする。

「小悪魔」「どう？ 綺麗でしょ？」

「僕」「う…うんっ…凄く綺麗っ…」

「小悪魔」「フッフッ…それじゃ、女の子の快楽を教えてあげる…」

小悪魔がそう呟くと、部屋の中心に魔法陣が現れ、回転し始めた。





【僕】「ひっ……」これは……？」

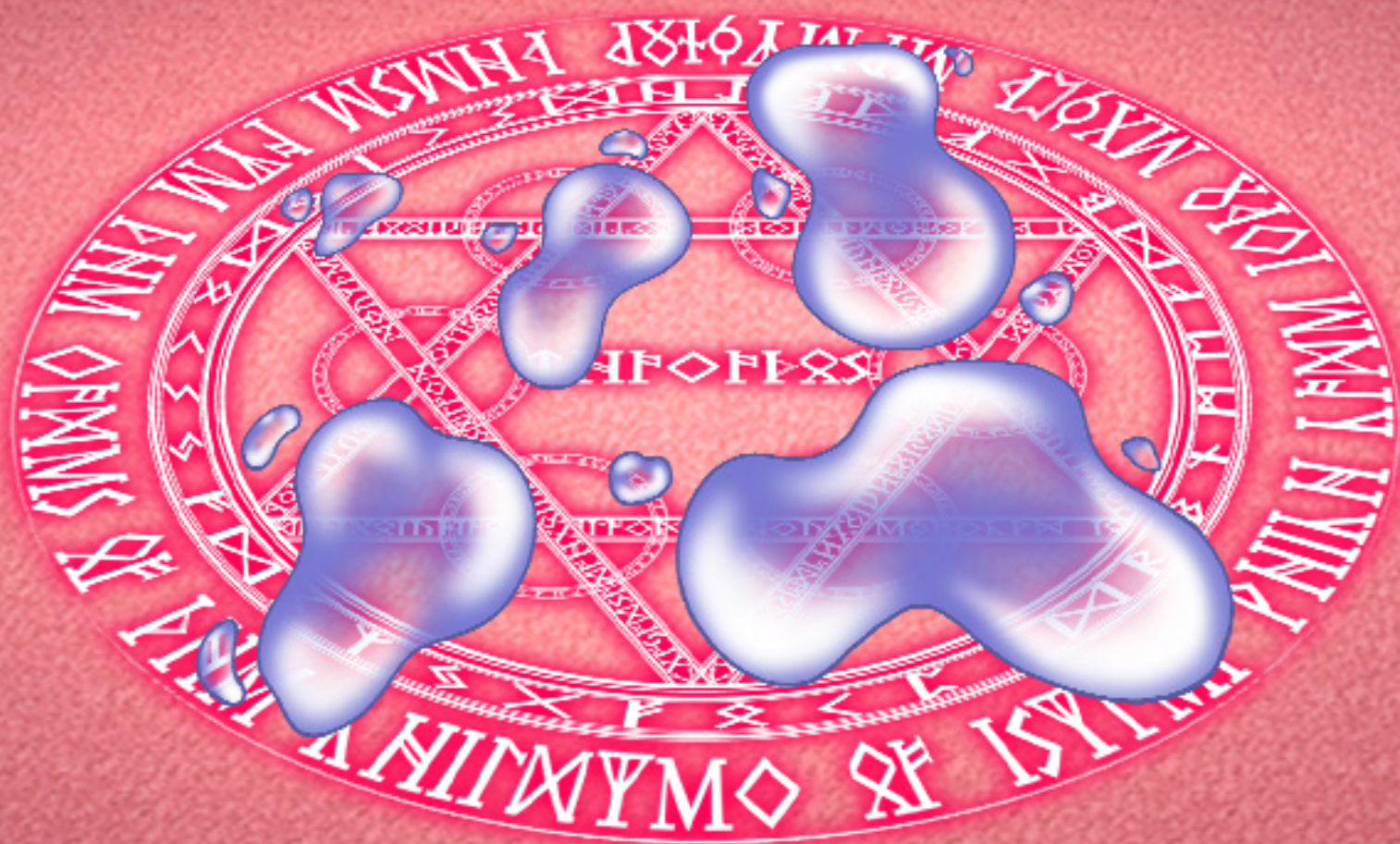
魔法陣から水が染み出すように、ゲル上の何かが溢れ出した。それはぶるぶると震え、分裂し、まるでアメーバのように蠢いた。

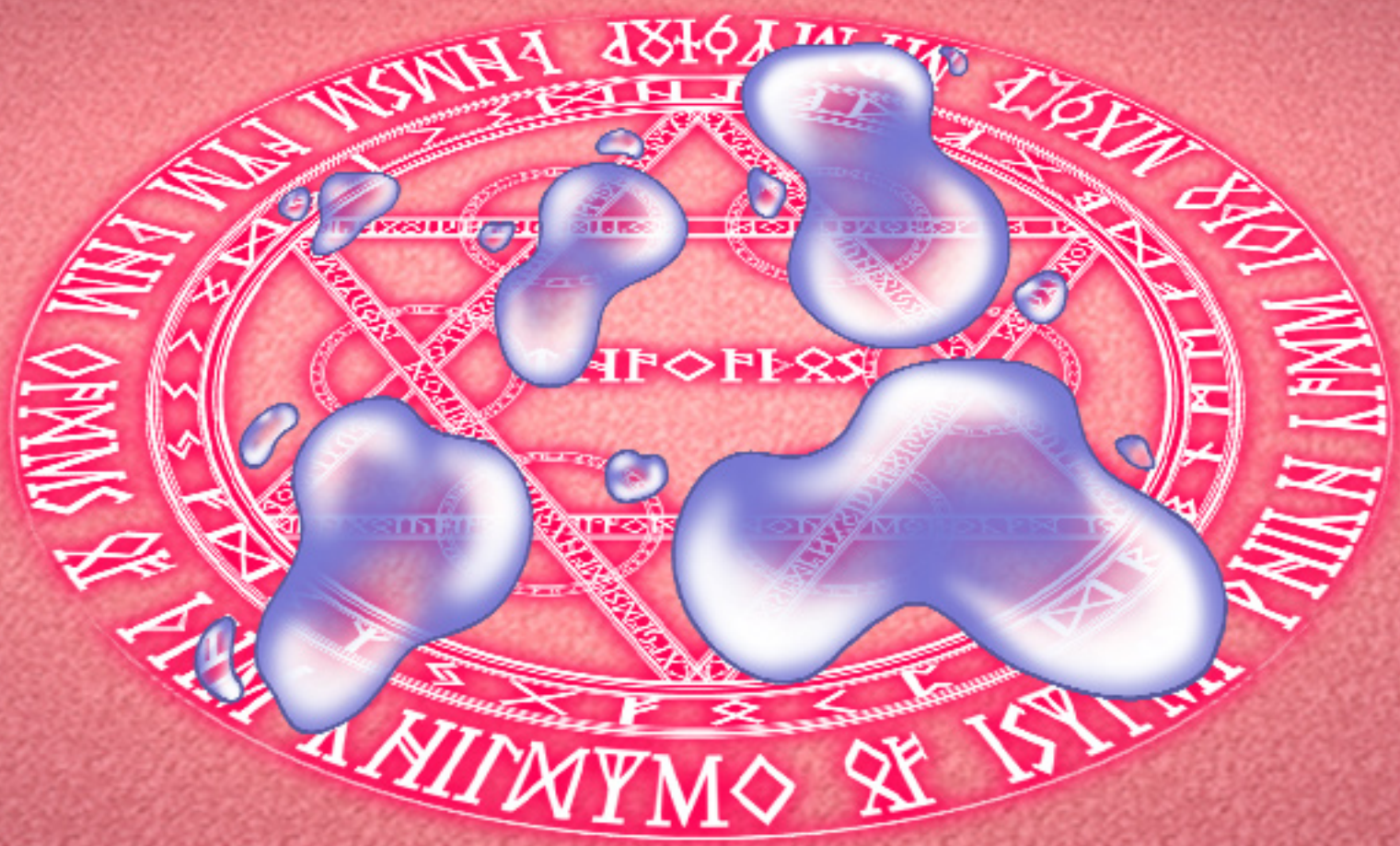
【小悪魔】「これはスライムという魔物です。ここの世界でも、ゲーム等で割と有名な魔物かと思えます」  
【僕】「……これがスライム……？」

スライムは地べたを這うように、僕の体へと近付き、よじ登り、体中に絡みつき始めた。

【僕】「ひっ……！」  
【小悪魔】「軟体で自在に変形するので、女の子初心者には丁度いい相手ですよ〜」

小悪魔は僕の狼狽を楽しむように、スライムを操り僕を攻め立て始めた。





【僕】「ひっ……！ ああああああ……！」

スライムに絡みつかれ、そのくすぐったい感触に、自分でも信じられないような声が溢れる。スライムが服のスキマから染みこんで、乳首やクリトリスなどの性感帯を愛撫する。

【小悪魔】「ふふっ……気持ちいいでしょ？」

スライムは膣のスキマに形を合わせ、そのままゆっくりと潜り込んで来た。スライムは、僕にこの体の性感帯を教えながら、ゆっくり蠢いた。



